

春野恵子／咲くやこの花インタビューvol.4

春野恵子(はるの・けいこ)【平成24年度 大衆芸能部門[浪曲】】



2016年12月2日(金)大阪市中心公会堂・大集会室にて、咲くやこの花芸術祭より『豪華絢爛！爆笑時代劇 女芸人たちの「大奥」～咲くやこの花 上方の乱～』を開催します。出演者で浪曲師の春野恵子さんは、幼少期をアメリカで過ごした帰国子女。現在は出身地の東京から大阪へと軸足を移し、公演のため国内外を飛び回っています。取材はNY、京都での仕事を終え、これから箕面、ロシア、長崎…へ向かうという、目まぐるしいスケジュールの合間を縫って行われました。90年代にはバラエティ番組「進め！電波少年」の東大卒の家庭教師・ケイコ先生として一躍人気を集め、女優としての活動も軌道に乗り始めた矢先、突如プロの浪曲師として舵を切った春野さん。そこにはどんな思いがあったのか。楚々とした佇まいとは裏腹に座右の銘に「無謀」を掲げ、「待っていても始まらない」と何度も熱い言葉が口をつく。エネルギッシュな生き様は彼女の話芸同様、誰の心にも明日への活力を与えてくれるはずです。

©取材・文・撮影＝石橋法子

「浪曲に出会い、本当の意味で私の人生が始まりました」(春野)

少し前になりますが、受賞当時のご心境からお聞かせください。



ご連絡を受けたときは驚きました。東京から大阪に来て、大阪の賞を頂けたのがすごく嬉しかった。私個人としてはもちろん、浪曲界に注目して頂けることが有り難かったです。咲くやこの花賞といえば、毎年受賞者の方々と様々なコラボレーション企画を開催されたり、華やかな印象でしたので、私もそこに仲間入りさせて頂けるのかなと。授賞式の日も狂言師や音楽家、作家の皆様方とご一緒させていただき、誇らしい気持ちでした。

4～6 歳までを米国テキサス州ダラスで過ごされ、帰国後は相撲や時代劇、そしてミュージカルに心惹かれたそうですね。どんな少女時代でしたか。

帰国当初、両親は日本語で、姉と私は英語で話していました。小学校では上靴という概念がなかったもので、外靴のまま学校の中を走り回ったり、同級生の男の子にチューをして周囲に大騒ぎされたり(笑)。家では父が集めたジャズが流れ、母は『ウエスト・サイド物語』『サウンドオブミュージック』が大好きで。私も自然と音楽やミュージカルが好きになりました。一方、祖父母の家で目にする相撲や時代劇も、私の目にはカッコ良く映ったんですね。お相撲さんの大銀杏や土俵入りの仕草も素敵だし、シンプルにまわし一つで戦う姿もカッコいい。小学生のときは白いウルフと呼ばれた益荒雄(ますらお)関が好きでした。横綱まではいかないけど、関脇止まりぐらいで金星を獲るタイプのお相撲さんが好きでした。

時代劇では松平健さん演じる『暴れん坊将軍』がヒーローだったとか。

め組の人がいて、町娘がいてという時代劇そのものの世界観に惹かれました。その中で、身分を隠して町に出て来た人が、じつは八代将軍・吉宗だったという、痛快な設定も面白かったのだと思います。

小学生としては目の付け所が渋いと思うのですが、話題を共有できる同級生はいましたか？

いなかったですね(笑)。でも相撲以外にも好きなことはあったので。ある日学芸会で、お芝居をすることになって。当時は人前でしゃべるなんて絶対に無理で、どちらかというと眼鏡をかけた書記タイプだったんですが。なぜかその時、主役の男の子の妹役に立候補したんです。

大決心をされたのですね。



なぜ立候補したんだろう？ 今でも不思議なんですけど。妹役には他にクラスで人気者の女の子も立候補していたので、絶対彼女に決まるだろうと思っていました。ところが、オーディションをした結果、多数決でクラスみんなが私を選んでくれた。勉強を誉められたり、かけっこで一番になることよりも一番嬉しかったですね。そこから、将来は舞台やお芝居の道に進みたいと思うようになりました。

書記タイプとはいえ、じつは表現することへの情熱も秘めていたのですね。

ちょうどこの頃、音楽の先生から「音楽の道へ進んでみては？」と助言されたことがありました。当時の私は親の目を気にして「算数の方が楽しいです」って答えたらしいんですけど。でも本当はミュージカルがす

ごく好きで、合唱も習っていたので。だから小学6年生の卒業文集には、「歌を歌ったりお芝居をすることを将来の夢にしたい」と書いていました。

時を経て、東京大学文科三類に合格。後に同教育学部へ進学されます。当時の夢は？

中高時代もミュージカルや英語劇、バンド活動をしていましたが、進路となると芸能一家でもないですし、小学生からの夢を口にしたり、自分で認めるのも恥ずかしいと思っていた時期。とはいえ、「成績がこのくらいだから、この大学に進学する」なんて決め方は、本当につまらない。「これをやりたい！」と自分の中から湧き出てくるものがないと何事も頑張れないタイプなので。その頃は、本心を押し込めつつ、その有り余るパワーを相撲に向けていました。



相撲ですか！？

高校時代は朝稽古を見てから通学していたので、進路も「相撲界で女性が活躍するには、どうしたらいいだろう」と考えて。その頃、相撲界ではスポーツ科学が取り入れられ始めた頃で、霧島関が筋トレに励んだり、舞の海関がスポーツ心理学を技に取り入れたり。そういう時代だったので、スポーツ心理学や科学を勉強して、相撲界に取り入れる先駆者になろう！と決めました。

進路をひねり出しましたね(笑)！

あるのは相撲界への情熱だけだったので(笑)、担任の先生にも「あなたの成績では絶対に東大は無理」と言われました。先生も浪人生を出したくないから必死ですよ。ね。「お相撲さんは、東大生の女の子なんて好きじゃないわよ」とまで説得されたり。それでも、「第一志望:東京大学文科三類、第二志望:なし」で決めてしまいました。

気持ちいいほどの潔さです。大学では夢に向かって一直線だったのでは。

ところが、教育学部でスポーツ科学を学べるのは3年生になってから。1、2年は一般教養なので、入学当初は友達と朝まで遊ぶ日々でした(笑)。みんなでお芝居をしたり、バントをやったり。大学に入ってから好きなことをやっていましたね。

舞台女優としての夢を抱えたまま、卒業後は出版社勤務を経て芸能界へ。間もなく「進め！電波少年」東大卒の家庭教師・ケイコ先生として人気を集めました。

ケイコ先生の企画自体はすごくやりがいがありました。でも、当時は何の説明もないまま連れていかれた一室で、突然「やりますか、やりませんか」とだけ問われて。何かのきっかけになればと思い「やります」と答えましたが、まさかそのまま8ヶ月も監禁されるとは。とても人気の高い番組でいきなり注目を集めたので、周りからは華やかに見えていたかもしれませんが、自分としては違っていた。タレントになりたかったわけでもなかったですし、「一生突き詰めてやっていくこと」を早く見つけたいと焦っていました。



そんな中、講談目当てにふらりと訪れた浪曲の寄席「木馬亭」で、浪曲と出会被ったんですね。

一生懸けてやれるものが見つからないと、本当の意味で自分の人生は始まってさえいないと思っていました。浪曲には古臭いイメージしかなく興味もなかったのですが、目の前で拝見して「これは時代劇でありミュージカルでもある。あれ？ 私のやりたいことが全て叶うぞ！」と、浪曲に出会えた時は本当に嬉しかったです。一生この道で生きて行こうと決めました。

2003 年、大阪に移り住み関西浪曲界の最高峰で女流浪曲の第一人者、二代目春野百合子門下に入門。弟子入りの際、髪の毛を 3 ミリ坊主にしたというのは本当ですか？



ドンキホーテでバリカンを買ってきて自分で坊主にしました。中学生の頃、サンプラザ中野さんのビジュアルがカッコいいなと思っていて、一度やってみたかったのです。春風亭昇太師匠には「髪が伸びるまで会いに来るな！」と、叫ばれました(笑)。

(笑)。春野さんからは、物事を見る独自の視点や感性、決断したときの思いきりの良さを感じます。そこは、ご自身でも意識される部分ですか？

良い意味で周囲に振り回されない。親には迷惑かけたと思いますが、でもそれは、両親が一般的な価値観を押し付けることなく育ててくれたお陰でもあった。例えば、女の子だから結婚しなさいではなく、自分がやりたいことをやって、生きていくんだとか。小さい頃から、「自分にとって幸せな生き方とはなんなんだろう」という事をずっと考えて生きて来た部分はありますね。そのために何が大事かといえば、経済的な自立です。男性に頼らず、自分の経済力で生きていけるようにしなければ。

その意味で、人生における座右の銘とは。

「無謀」です。常に、無謀と思われることにチャレンジし続けたい。よく人から、「思ってた人と違う！」って言われます(笑)。

「浪曲という話芸で海外のエンタメ界にインパクトを与えたい！」(春野)



2006 年の初舞台から、今年で 10 周年を迎えられました。国内外を飛び回る今のご活躍を思えば、遠いところまで来たなというご心境でしょうか。

大阪へ来たばかりのころは岸和田のウィークリーマンションで、冬は毛布をかぶりながらお稽古していました。暖房を 30℃に設定してもすきま風が入って来てすごく寒かった。いつになったら舞台に立てるのかなという感じだったので、今浪曲の収入だけで生活できていることで、親も安心していると思います。

ご両親はもちろん、入門当初から応援されてたんですね。

木馬亭で初めて浪曲と出会った日、明け方まで浪曲師になるか、なるまいかを考えて。夜中の 4 時ぐらいに「よし決めた！」と。人生を左右するほどの決断だったので、すぐに母の寝室に駆け込んで「起きてー！私、浪曲師になることに決めたからー！」と報告しました(笑)。その後、親にも告げず”失踪”して。弟子入りのため大阪で暮らすと言うと、母が心配して反対されと思ったので。



ご両親に迷惑をかけたという詳細が、だんだんわかってきました(笑)。

ほんと、もしも自分が娘を持つ身だったらと想像すると、母にはよくぞおおらかで居てくれたなと感謝しています。

2014 年には浪曲界初のクラウドファンディングを行い、海外公演を実現されました。

ある日「NY 公演をやりたいな」と思い付いてしまったことに始まるんですけど。思い付いたら実行しないと気がすまないタイプ。でも、一歩踏み出して良かったなと思います。やっぱり、自分から動かないと待っていても誰も呼んではくれないので。お陰さまでたくさんの方々からご支援を頂き、NY 公演だけでは使いきれず、ドイツ、中国にまで行かせて頂きました。

その後もロシア、モンゴル、イタリア、日本の裏側ブラジルまで！ 開催地も拡大し毎年海外公演を継続されています。

わりと早い段階から海外での活動が実を結び始めて、去年のローマ公演を観に来て下さったローマ大学の先生からお声掛けを頂き、今年度はローマ大学での招聘公演が叶いました。皆様のご支援に支えられて始めた海外公演なので、一回で終わっては意味がない。一步一步地道に回を重ねて浪曲の輪を広げていきたいですね。

海外の方は、どんな感想が多いですか。

一人で何役も演じながら、浪曲という語り芸で物語に命を与える様はアメイジングだねと。パワフルでエモーショナルというのは、私の特徴だと思うんですけど。「すごく面白く、美しい経験でした」と書いて下さった方もいました。今年の NY 公演では、全編英語で語る「英語浪曲」と英語の字幕を付けた「日本語浪曲」の両方をやりました。やはり英語浪曲の方がダイレクトに伝わるようで、他の演目も見たいというお声も頂いたので、来年は英語浪曲二席でもいいのかなと考え中です。



一方で、お子さん向けの公演にも力を入れてらっしゃいます。やはり継承者を増やしたいとの思いから？

そうですね。小中学校で公演する機会も増やして行ければと思います。待っていても始まらないので、以前は自ら未就学児の子供たちをメインにした公演を企画して、会を開いたこともありました。子供たちがメインなので、大人も来てもいいけど、子供たちが騒いでも文句言いつこナシですよって(笑)。

瞬時に声色や表情が変わる浪曲は、案外幼い子の方が集中して聞いてくれそうですね。



物語は分からなくても、例えば三味線の音色とか。リズムカルな節に差し掛かると、それまでお母さんに抱っこされていた赤ちゃんが、いきなり体を揺らし始めたりする。その姿に「お～！」と思ったり。そうやって体にリズムが残ったり、色んな経験をしてもらえるのが良いのかなと。浪曲は日本人でも「知らないのが当たり前」ですが、私はむしろそこにやりがいを感じています。一席でも聞いて頂くと「え？ 面白い！」と、かつての私のような反応を頂けるので。なるべく公演の機会を増やして、同時に浪曲師も増やしていければ。

嬉しいことに、近年は 2011 年当時、関西最年少の現役高校生浪曲師としてデビューした真山隼人さんや、浪曲に出会うまではヘビーメタルバンドのボーカルを務めていた(!)という京山幸太さんなど、若手の入門者も増えつつあるようですね。

本当に幸太くん、隼人くんが入って来てくれたことは私にとって何よりのご褒美だと思います。木馬亭でも若い子たちが、それぞれの個性で頑張っていますね。確かに浪曲には色んな音楽の要素が入っているので、バンドとの共通点があるのかもしれません。ロックに通じる魂の叫びとか、ブルース、ジャズ、ラップに似ているねと言われる方もいますしね。



春野さんご自身も英語やバンド活動など、これまでの経験がすべて武器になっている印象です。

浪曲師になったときは坊主にして携帯を捨てて、すべての縁を断ち切って。ある意味それまでの自分を否定していたのかもしれませんが。それが10年経って、昔の自分を認めてあげてもいいのかなと。やっぱり自分で会を開くようになってからですね。きっかけはなんでもいいので、とにかく浪曲を聞いてもらいたいと思うようになりました。実際ケイコ先生のファンで浪曲を聞きに来てくれた方が、そこから他の方の浪曲も聞きに行っておさる。そういう姿を目の当たりにしてからは、「ケイコ先生も必然だったのかな」と(笑)。今は浪曲師になる前に聞いてきた音楽で浪曲を語る「ロック浪曲(ロウキョクンロール)」という企画にも挑戦しています。浪曲師以前と以後の自分が融合して、更に幅の広い表現ができるようになったらいいなと。

そのお気持ちに至るまでには、時間が解決してくれた部分もあるのでしょうか。

時間というより、優先順位ですよ。何を優先するのか。自分の感情よりも、いかに浪曲を広めていくか。浪曲があるから今の私は生かされていますし、浪曲に出合えたこと、師匠に出会えたことが、やっぱり私の人生の中で一番幸せなことだと思うので。江戸時代末期、明治の初めから現在まで、浪曲界の長い歴史の中で私が浪曲師でいられる時間は短いかもしれませんが、その中でどれだけのことができるのか。次の世代に何とか繋げて、恩返しをしていきたいなという気持ちです。

最後に、これからのお話を聞かせて下さい。今想い描く夢や目標とは？

「浪曲 POPS 偉人伝 the LIVE」は楽しいですね。もともとラジオ番組で洋楽アーティストの人生を浪曲で紹介するという企画をやっていて、ラジオでは浪曲の後にそのアーティストの楽曲を流すのですが。ライブでは、洋楽まで自分で歌ってしまおうと。今春から「春野恵子音楽活動スタート！」みたいな(笑)。「浪曲 POPS 偉人伝 the LIVE」ではビートルズ、カーペンターズ、キャロル・キング特集などを行っています。

海外公演としても通用しそうですね！

特にキャロル・キングはNY出身なので海外でやったほうが良いとの声を多く頂きますね。今年のNY公演では、現地で彼女を題材としたミュージカル『ビューティフル』を観劇してきました。やっぱり彼女はみんなに愛されているんだなと実感しました。英語浪曲もそうですが、浪曲という語り芸で海外のエンターテインメントに、何かしらの影響を与えられることができれば面白いなとも思います。ただ、基本的には古典の浪曲をしっかり務めたい。先日、梅中軒鶯童先生の『籠釣瓶百人斬り(吉原百人斬り)』を勉強させて貰いましたが、自分の一門とは違う節回しを改めて勉強すると面白いですね。そういう違いを一杯体に入れていくのが重要なこと。私のような10年選手なんて浪曲界ではペーペーですし、ここで改めて仕切り直して勉強していきたい。次は富士月子先生の『貝賀弥左衛門』とか、色々な師匠方の面白いネタを掘り起こしていきたいと思います。

12 月には『豪華絢爛！爆笑時代劇 女芸人たちの「大奥」～咲くやこの花 上方の乱～』に出演されます。その他、舞台女優として小劇場の舞台に立たれるなど、今後も幅広い活躍に期待が高まります。

浪曲師が色々な場で活躍するというのは珍しいことではないんです。昔は浪曲師が映画にも出るし、浪曲を元にした「浪曲映画」が何本も封切られた。浪曲師が長者番付に名を連ねる一番のトップスターであり、そこから色々なものが作られる時代があった。そんな歌も芝居もできる浪曲師を知って頂くという意味でも、色々なことにチャレンジしていきたいですね。12 月の公演は桂米團治師匠、桂あやめ師匠らと共に、笑いの多い楽しいお芝居になると思います。ぜひ楽しみに観に来て欲しいですね。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……関西風のうどんの出汁ですね。母が作ってくれた関東風の真っ黒い出汁で育ってるんですけど、関西に来てからはやっぱり関西風の出汁が美味しいです。ごめんなさい、お母さん(笑)。